



file.03

現場で鍛えられた トップとしての責任



株式会社ダイニチ代表取締役
六井 元一さん

えられたにもかかわらず、地元とのコミュニケーションが不足していた。今では地元からも受け入れられ、「ダイニチのゲンちゃん」と呼んでもらえるようになりました。

覚悟の介護事業参入

平成十五年、六井さんは四十歳の若さで(株)ダイニチの代表取締役に就任。翌年には大型マンションやウィークリーマンション、ビジネスホテル等、短期宿泊型施設運営などの新規事業を立ち上げた。

『介護付き有料老人ホーム舞浜倶楽部(現・富士見サンヴァーロ)』も同年の開業だ。しかしこれは「十年間悩んだ末の決断」だった。

「当社は浦安で再起し、浦安に留まって成長しました。その浦安も高齢化が進んでいます。浦安の人たちがずっと安心して暮らしていくために必要なもの、それが介護事業でした。でも一度始めたら途中で引き返すことはできない。責任の重い事業です」

滑り出しは好調で、平成十九年には「舞浜倶楽部新浦安」も開業。介護先進国のスウェーデンから総支配人を招いて質の高いケアを提供すると共に、認知症緩和ケアの研究の計画もあり、「将来

浦安・行徳・妙典のビルやマンションの屋上などでよく目にする、浦安の「J」をかたどった緑と青と白の三色のマーク。『ダイニチ』のロゴマークだ。不動産会社として七十年余の歴史を持つ同社は、六井元一さん(47歳)の代表取締役就任以降、介護やウィークリーマンション、ビジネスホテル等の短期宿泊型施設や研修施設の運営事業などにも参入。経営の多角化を進めている。

浦安の可能性に 社運を賭けた

今や地元密着企業としておなじみの『ダイニチ』だが、その発祥は東京三鷹。六井さんの祖父の乙吉さんが昭和十二年に始めた木造賃貸アパートが始まりだった。

「浦安に進出したのは昭和四十四年。父やおじ、おばが都内でやっていた建売業は土地の高騰で頭打ちの状態でした。そんなとき、取引先の銀行から「沖の百万坪計画」という話を聞き、都心へのアクセスがよく発展の可能性のある浦安という土地に賭けたのです」

父の兄弟がそれぞれ会社を統合して設立した(株)大日本建設は、浦安で

建てた家を都内で販売して成功。業績も回復していった。

しかし「最大の転機は昭和六十年代の不動産の運用事業(開発、賃貸、管理)への参入」だった。当時、浦安は都内への通勤圏として住宅や寮の需要が増え、賃貸物件や管理物件の需要も増加していた。

後継者だからその 仕事

六井さんは大学卒業と同時に同社に入社。いきなり立ち上げたばかりの事業を担当することに。「その時はまだ取扱件数二百件ほど。収益など簡

単に上がるはずもありません。でも社長からは、早く結果をと矢の催促。現場で叱られたり殴られたりしたことも。強烈でした」

一般的な新人社員なら辞めているところ。しかし六井さんにそれは許されなかった。当時の社長であるお父さんはそれを承知で、あえて新人社員である息子に難しい仕事を課したのだった。

「立ち上げたばかりの事業」が、現在の事業の柱となっている「不動産の賃貸・管理事業」である。しかし、業績も上がり、金融機関など取引先の評価は得られても、地元とのつながりを感じられなかった。浦安の発展に支

は地域の介護拠点に」との期待もある。

企業トップの責任

新規事業への積極的な取り組みからは少し意外な気もするが、六井さんはかなり慎重な経営者だ。

この三年間は、景気の波の影響を受けやすい不動産開発ではなく、「コアビジネスである不動産の賃貸・管理でしっかりと食べていける会社づくり」に集中した。目標を「前倒しで達成」した今年からは、リフォーム事業にも力を注いで「地域の人と建物を高齢(老朽)化による機能不全から守って、安心して暮らせる街をつくりたい」という。

まずは安定経営を維持して顧客・社員への責任を果たし、そのうえで会社への責任も全うしようとする。

「幼い頃から、自らやっつけて判断し責任を持つこと以外、手を出してはいけないと言われて育った」という六井さん、帝王学で身に付いた責任感の強さや行儀の良さは自ずと経営にも表れる。厳しく、しかし大切に育てられた社長の器である。

Profile

1963年東京生まれ。明治大学経営学部卒業。大学在学中はラグビー部に所属。1986年(株)ダイニチに入社。2003年より同社代表取締役。家族は妻と娘。趣味はゴルフとステンドグラス製作。座右の銘「お天道さまは見ていますよ！」